

菟原処女の墓を見る歌一首 并せて短歌

一八〇九番

葦屋の 菟原処女の 八歳子の 片生ひの時ゆ 小放りに 髪たくま
でに 並び居る 家にも見えぬ 虚木綿の 隠りて居れば 見てしか
と いぶせむ時の 垣ほなす 人のとふ時 千沼壮士 菟原壮士の
伏せ屋焼き すすし競ひ 相よばひ しける時には 焼大刀の 手か
み押しねり 白真弓 鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立
ち向かひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤しき
我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや し
しくしろ 黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹
が去ぬれば 千沼壮士 その夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ
後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み きかみたけ
びて もころ男に 負けてはあらじと かけ佩きの 小大刀取り佩き
ところづら 尋め行きければ 親族ども い行き集ひ 永き代に
標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き
壮士墓 このもかのもに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども
新喪のごとも 音泣きつるかも

反歌

一八一〇番

葦屋の 菟原娘子の 奥つ城を 行き来と見れば 音のみし泣かゆ

一八一一番

墓の上の 木の枝なびけり 聞きしこと 千沼壮士にし 依りにけらしも